

英語圏の児童書選書にかかわる調査報告書

平成 25 年 2 月

報告者：清泉女子大学英語英文学科准教授

笹田 裕子

(1) 国際子ども図書館の所蔵資料の評価、所見

英米の主要な児童文学賞といえば、前年に出版された「アメリカ児童文学に最も貢献した優れた作品」に授与される、アメリカ最大の児童文学賞であるニューベリー賞 (The Newberry Medal; 1922 年創設)、前年にイギリスで出版され英語で書かれた「子どものための (2001 年「子どもと若者のための」に変更) 本のうち際立って優れた作品 (1940 年代より「前年の最良の本」に変更)」を対象とするイギリスの児童文学賞 CILIP カーネギー賞 (The CILIP Carnegie Medal; 1936 年創設) が挙げられる。また、英米の絵本賞の双璧をなすのは、前年にアメリカで出版された子ども向け絵本のうち最も優れた作品にアメリカ図書館協会が授与する、ランドルフ・コールデコット (Randolph Caldecott; 1846-86) にちなむコールデコット賞 (The Caldecott Medal; 1937 年創設) と、前年にイギリスで出版された本のうち、「イラストレーションの点で最も優れた子どもの本のための作品」にイギリス図書館協会 (現 CILIP = the Chartered Institute of Library and Information Professionals : 図書館・情報専門家協会) が授与する、ケイト・グリーンナウェイ (Kate Greenaway, 1846-1901) にちなむ CILIP ケイト・グリーンナウェイ賞 (The CILIP Kate Greenaway Medal; 1955 年創設) である。

これら 4 大児童文学賞に関して、国際子ども図書館所蔵資料は、受賞作品のみならず、ニューベリー賞およびコールデコット賞のオナー (次点) 作品や「特別推薦作品」または「推薦作品」(いずれも CILIP カーネギー賞および CILIP ケイト・グリーンナウェイ賞の次点作品に当たるものだが、2003 年以降リストアップされていない) に至るまで、過去 10 年間に出版された作品は、ほぼ全作品が既に網羅されていた。

そこで児童書に関しては主に、4 大文学賞を補完する目的で創設された文学賞および異なる視点からの賞の受賞作品に目を向けた選書を心がけた。例えば、「児童とヤングアダルトのための優秀な文学を表彰」し児童書の水準を上げることを目的に、『ホーンブック』誌が新聞社のボストングローブと共同で 1967 年に創設したボストングローブ・ホーンブック賞 (The Boston Globe-Horn Book Awards) や、文学的価値が高い作品が選ばれることで知られる、1967 年以降年に 1 度イギリスまたはイギリス連邦の作家に拠る「子どものための傑出したフィクション作品」に授与されるガーディアン賞 (Guardian Children's Fiction Prize)、1985 年「子どもの本の高い水準を奨励し関心を高めるために」創設され 2008 年に廃止されたネスレ・スマーティーズ賞 (Nestlé Smarties Book Prize; 1992 年まではスマーティーズ賞、2005 年以降はネスレ子どもの本賞)、あるいは、エズラ・ジャック・キーツ (Ezra

Jack Keats, 1916-83)にちなむ、新人イラストレーターや絵本の文を手がける新人作家に与えられるアメリカのエズラ・ジャック・キーツ賞(Ezra Jack Keats Book Award; 1985年創設)やアメリカの「最も優れた子ども向け科学絵本」に授与されるジヴェルニー賞(Giverny Book Award; 1998年創設)などの絵本賞がこれに当たる。

(2) 過去10年間(2000~2009年)に出版された英米児童書の特徴

この10年間の児童書の背景には、2007年に完結したJ・K・ローリング(Joanne Kathleen Rowling, 1965-)の〈ハリー・ポッター〉シリーズが引き起こした「ハリーポッター効果」と呼ばれる現象がある。この現象は、1997年に第1巻『ハリー・ポッターと賢者の石』(*Harry Potter and the Philosopher's Stone*)の出版と同書がカーネギー賞推薦作品となったことから始まった。〈ハリー・ポッター〉シリーズは子どものみならず大人をも夢中にさせ、児童書はファンタジーと併せて突如流行のジャンルとなり、従来よりも広範にわたる年齢層の読者を獲得することができる「クロスオーバー本」が隆盛を極める。「クロスオーバー本」とは、もともとは子ども読者を対象として出版された作品でありながら大人にも愛読される本のことである。

子どもの本を大人が好んで読むという「クロスオーバー現象」は、子どもの本と大人の本の境界線を曖昧にし、その結果、読者の年齢を問わず読みごたえのある作品が出現するようになる。〈ハリー・ポッター〉と同時期に多くの読者を獲得したファンタジー作品としては、『黄金の羅針盤』(*Northern Lights*, 1995)に始まるフィリップ・プルマン(Philip Pullman, 1946-)の〈ライラの冒険〉三部作が挙げられる。だが、文学賞受賞という観点から考えると、両者は対照的である。〈ハリー・ポッター〉は、シリーズ第1巻~4巻はガーディアン賞をはじめ多様な文学賞を受賞したものの、その後第5巻以降はどの賞にもリストアップさえされなかった。これに対して、〈ライラの冒険〉三部作最終巻『琥珀の望遠鏡』(*The Amber Spyglass*, 2000)はウィットブレッド賞(Whitbread Children's Book Award; 書籍販売会が1972年以降児童書部門を設け「7歳以上の子どものための傑出した本」に授与; 1998年以降は「ハリーポッター現象」を受け児童書も他部門と同様最優秀賞の対象となる)の最優秀賞を獲得した。つまり、最終巻であらためて高い評価を得た〈ライラの冒険〉と異なり、〈ハリー・ポッター〉がシリーズ全体としては高い評価が得られなかったことが分かる。とはいえ、両作品が読者の年齢差のみならず、本を読む者と読まない者との差異も縮めてしまったことは確かである。通例分厚いハードカバーを読むことなど稀であった十代の男の子までがこの2つの大作には夢中になった。

「クロスオーバー本」以外には、多文化へ視点が向けられるようになったことによる作品の多様化と、ダークファンタジーへの傾斜が、この10年間の児童書の特徴である。各賞受賞作品を概観しても、作品の舞台や主人公の国籍がもはや英語圏のみとは限らないことは顕著である。また、〈ライラの冒険〉は決して明るい内容だとは言えず、〈ハリー・ポッター〉も巻を追うごとに内容が暗くなるが、ダークファンタジー流行の皮切りとなった作

品は、2000年の第1巻出版に始まる〈ダレン・シャン〉シリーズであることは言うまでもない。半吸血鬼の主人公ダレン・シャンはやがて^{ヴァンパイア}吸血鬼ブームへとつながり、映画と共に〈トワイライト〉シリーズが人気を博するようになる。大流行にもかかわらず、両シリーズは文学賞の対象とはならなかった。同様に、2008年に第1巻が出版された別世界を舞台に^{サバイバル}生き残りゲームを描く〈ハンガー・ゲーム〉三部作は、2012年の映画化によって書店での売上げが急上昇したが、どの文学賞にもリストアップされていない。

だが、ニール・ゲイマン(Neil Gaiman)の『墓場の少年 ノーボディ・オーエンズの奇妙な生活』(*The Graveyard Book*, 2008)が2009年にはニューベリー賞、2010年にはカーネギー賞を受賞したことからも明らかなように、ダークファンタジーに傾倒した作品すべてが評価されていないわけではない。2004年ポストグローブ・ホーンブック賞オナー作品となった『バーティミアス——サマルカンドの秘宝』(*The Amulet of Samarkand*, 2003)に始まるジョナサン・ストラウド(Jonathan Stroud, 1973-)の〈バーティミアス〉三部作も、太古から人間と関わってきた魔神が主人公という一見ダークヒーローものである。人間ではない存在という他者を通して描かれるヒューマニズムが、両者の共通項である。

(3) 過去10年間(2000～2009年)に出版された英米児童書関連資料の特徴

児童書に影響を与えた「ハリー・ポッター現象」や視点の多様化は、この10年間の英米児童文学・文化研究にも反映されている。2000年の英語圏の研究書には、1999年にユーロが共通通貨となったのを受け、EUの影響でヨーロッパという単位を意識するようになったことに伴い他国や多文化理解の姿勢が見られるが、この姿勢はやがて英米以外の英語圏を視野に入れた研究、グローバリズムへとつながっていく。

教育の方面でIT技術を取り入れた教授法に注目が集まるようになるのは2000年以降のことだが、やがてウェブサイトの情報が研究資料として重視され始め、参考文献ブックリストにも書籍以外にウェブサイトを収録する文献が増加するのも、この10年間に起きた変化の1つとして挙げられる。

2001年には、ケンブリッジ大学出版とコンティニューム社が、児童文学に関する基本的情報を網羅した事典を出版する。また、映画『ロード・オブ・ザ・リング』の公開に伴い、J・R・R・トールキン(John Ronald Reuel Tolkien, 1892-1973)関連書籍が相次いで出版される。2002年には、本格的な研究論文を含むハリーポッター関連書籍が盛んに出版されるようになる。この頃からラテンアメリカ系作家やアフリカやブラジルの児童文学に目が向けられ始め、着眼点はさらに多様化していく。児童文学研究のキーワードとしては、現代文学理論に基づく「ポストモダニズム」やフェミニズムが発展した「男性性」および戦後60年を意識した「ホロコースト」などが挙げられる。

2003年には、書籍にとどまらず、映画やテレビ番組など新しいメディアを対象とした分析も行なわれるようになり、2004年には、環境問題を受けたエコクリティシズムやクィア理論など新しい観点が分析に導入され始める。また、多文化との共存や影響関係への興味

が翻訳研究への興味につながる。新しい視点や多文化への関心が高まる反面、2005年から2006年にかけては作家の生誕200年や出版100年を機に、古典を見直し歴史的意義が考察される。2008年には『赤毛のアン』出版100年を受け、同作品の研究書が多数出版される。『不思議の国のアリス』出版150周年にあたる2015年に向けて、古典作品の見直しや作者に対する関心はさらに高まることが予測される。

「クロスオーバー本」の影響で、このジャンルに属する作品が研究されるだけでなく、2007年頃から従来の境界線を越えた作品比較、すなわち大人の文学と児童文学、あるいはジャンルやメディアの垣根を越えた比較研究が行なわれるようになる。一方で、子どもに人気が高く大人には不人気の作品や、視覚表現も含むサブカルチャーへの関心も高まりつつあり、児童文学・文化研究の対象や視点はさらに多様化していくと考えられよう。